



第 37 回日本核医学技術学会総会学術大会印象記

尾川 松義
Ogawa Matsuyoshi

第 57 回日本核医学会学術総会（会長 井上登美夫先生（横浜市立大学大学院医学研究科 放射線医学））及び 37 回日本核医学技術学会総会学術大会（大会長 渡邊 浩先生（横浜労災病院））は、2017 年 10 月 5～7 日の 3 日間、横浜市みなとみらい地区のウォーターフロントにひろがるパシフィコ横浜で開催されました（写真）。

パシフィコ横浜は、春季に行われる日本医学放射線学会総会及び日本放射線技術学会総会学術大会が開催されるため、既にご存知の方も多いかと思います。今大会は 10 月に開催されたため、春とは違う色づき始めた秋の横浜が感じられ、近くの山下公園や日本大通り、港の見える丘公園等へ時間の合間に散歩へ行かれた方も見受けられました。

今大会は、第 12 回アジア・オセアニア核医学会学術会議（AOCNMB 2017）も開催されていました。1976 年に第 1 回が行われ、日本開催は京都で行われた第 6 回（1996 年）以来となる、21 年ぶりの開催とのことでした。また、第 7 回アジア核医学技術学会国際会議も同時開催されたこともあり、海外からの参加者も多く見られました。海外からの参加者

へのおもてなしとして、語学力に長けた横浜市の中学生在が笑顔で会場案内を行っていたのが印象的でした。14 の会場に分かれてプログラムが行われていたため、海外から参加された方にとっては、頼もしい案内人だったと思います。

大会メインテーマを「核医学の明るい未来に向けて」として、がん細胞の様々な活動状態を対象として画像化する「分子イメージング」や放射性同位元素を用いて体内のがん細胞に作用して治療を行う「RI 内用療法」、FDG-PET における SUV の施設間差や装置間差の影響を調整する「PET の標準化と調和化」等のとても魅力的な内容で構成されていました。また、著名な先生方をお迎えした講演やシンポジウムや沢山の研究発表が行われ、多くのプログラムの中から、どのプログラムを聴講しようかと悩まされました。

大会初日、第 1 会場メインホールにて井上登美夫先生と渡邊 浩先生による会長・大会長講演が行われました。井上先生から「Sustainable Future Development of Nuclear Medicine in the Asia and Oceania Region」をテーマにアジア・オセアニアにおける核医学の未来に向けて講演が行われました。核医学は、1970 年代後期から発展し、超音波検査や CT 検査、MRI 検査等の画像診断技術に一部検査が置き換えられてきた歴史を紐解かれていました。FDG と PET/CT 装置の組み合わせによる臨床診療により形態画像と機能画像が融合され、腫瘍核医学領域において注目される検査になったとお話されていました。また、 α 線や β 線を放出する放射性同位元素で標識された RI 内用療法が登場し、治療と診



写真 パシフィコ横浜

断の融合である Theranostics や核医学検査の標準化等これから発展が期待される分野について述べられていました。核医学の発展は、薬学や分子生物学、免疫学、化学、工学、コンピュータサイエンス等多くのアカデミックな分野の発展に支えられ、今後も連携が核医学の発展には重要であるとのことでした。

特別基調講演として、国際原子力機関 事務局長の 天野之弥 先生が「MEETING THE CANCER CHALLENGE IN DEVELOPING COUNTRIES」をテーマに IAEA における取組みについて紹介されていました。2030 年までにはがん症例の約 60%が発展途上国で発生するといった予測やアフリカ諸国における放射線治療施設の現状、命を救うための核技術の利用等について講演されていました。核医学検査や放射線治療を必要としている地域があり、医療技術の向上や人材育成等多くの課題を抱えていることについて述べられていました。

JSNM-JSNMT 合同シンポジウムとして、「内用療法の普及と安全利用」をテーマに医師と看護師、薬剤師、診療放射線技師の多職種から内用療法に関する発表が行われました。各施設で行われている RI 内用療法について、その運用や課題を取り上げ、職種の違う視点から普及に向けた課題について討論されていました。放射線治療病室の有無や臨床体制等が異なる環境で各施設や各職種の方々が内用療法を円滑に行うためにカンファレンスの場を持ち、互いの業務を理解し調整を行う等、各施設での取組みを知ることができました。また、 ^{131}I を用いた甲状腺治療や ^{223}Ra を用いた骨転移に対する治療、そして ^{177}Lu を用いた神経内分泌腫瘍に対する治療等投与方法や管理方法のバリエーションも多くなっている現状が理解できました。放射線治療病室を持たない施設にも内用療法が広がり、身近に感じられるものになっていくように感じました。内用療法は他の核医学検査と同様に、多職種間の連携が必要となることから、チーム医療の重要性が増し、患者を中心とした連携が発展のカギとなるように感じました。

2 日目は一般演題やシンポジウム、教育講演と充実したプログラムで構成されていました。昨年同様

にドパミントランスポータに関する内容が多く発表されており、その関心の高さを感じました。

「内用療法の国内展開のために」をテーマにメインホールにて特別シンポジウムが行われました。このシンポジウムでは RI 内用療法の現状と問題点や将来の展望について厚生労働省や原子力規制委員会原子力規制庁、医療機関、そして患者支援団体と様々な立場の方々がシンポジストとなり、ディスカッションが行われました。午前中のセッションにも関わらず、座席には多くの聴講者の姿が確認でき、その関心の高さがうかがえました。関係諸学会が単独でドラッグラグ等の問題に取り組むのではなく、患者支援団体や関係機関と協力し、研究・診療の推進に向けて取り組むことが大切であると述べられていました。

最終日は市民公開企画として、小学生を対象に「教えて、宇宙で活動する技術、放射線が見せる世界」をテーマに講演が行われました。横浜国立大学 上野誠也先生から宇宙で活動するための技術に述べられていました。地球から火星探査に必要な技術や宇宙線から身を守るための宇宙服等放射線についても取り上げていました。また、横浜市立大学の杉浦 円先生と筆者から病院で利用される放射線についてクイズ形式で紹介しました。宇宙について興味がある小学生の参加が多いため、放射線関係の話に興味を持ってもらえるか心配しましたが、質問時間になると会場の半数以上の小学生が手を挙げ、宇宙探査技術についてはもちろんですが、放射線診療についても多くの質問が寄せられ、会場が盛り上がりを見せていました。

今大会は 2,404 名の参加があり、盛会のうちに終了しました。大会テーマにもありました、核医学の明るい未来に向けて多くの講演や発表が行われ、小・中学生の活躍もあり、大いに将来へ希望を持つことができた大会だったように思います。ご尽力された井上先生、渡邊先生をはじめ実行委員の方々、協賛各社の皆様に感謝いたします。

(横浜市立大学附属病院 放射線部)